

Title	2) 「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院 GP〕採択：小児科領域における心理臨床の実践と他職種との連携に関する研究
Author(s)	佐々木, 麻子; 角野, 善宏; 市原, 有希子; 笹倉, 尚子; 長谷川, 千紘; 平井, 久世; 高橋, 優佳; 中野, 江梨子; 岩城, 晶子; 加藤, のぞみ
Citation	研究開発コロキウム：平成21年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) (2010): 34-35
Issue Date	2010-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/143156
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

小児科領域における心理臨床の実践と他職種との連携に関する研究

Research on Practice of Psychotherapy and Cooperation with Other Professions in Pediatrics

研究代表者：佐々木 麻子 (D2)

指導教員：角野善宏

研究分担者：市原 有希子 (D3)・笹倉 尚子 (D3)・長谷川 千紘 (D2)・平井 久世 (D2)

高橋 優佳 (D1)・中野 江梨子 (D1)・岩城 晶子 (M2)・加藤 のぞみ (M2)

〔研究目的〕

本研究グループの母体である Paedie 研究会（ペディ研究会）は、平成 5 年より京都府立医科大学付属病院小児科（以下、府立医科大と略記）の外来にて、心理療法の実践を継続してきた。平成 15 年には、「子ども心療外来」として同病院小児科に心理外来が設置され、平成 17 年より、病棟の入院患者への心理療法も開始されることになるなど、医師の協力のもとに徐々に体制を整え、新たな活動の広がりを持つようになってきた。

この過程を通じて我々研究メンバーは、心理的な問題や不適応行動を示す子どもへのプレイセラピーや、その親への心理面接が意義深いものであると改めて認識するとともに、小児科領域においてもまた、身体症状や身体疾患のある子どもへのプレイセラピーが必要であるとの思いを確かなものとして抱くようになった。小児科領域において心理臨床を行う上で、看護師・医師などの医療従事者との連携は欠かせないものであるが、それには、心理臨床の必要性や有用性を医療従事者との間で共有することが重要となる。そしてそのためにはまず、互いの職業上の認識や見解の相違を丁寧に見極め、相違を理解した上で、連携を円滑に進めるための工夫が必要となるのではないだろうか。

このような問題意識のもと、小児科領域における心理臨床の可能性や医療従事者との「連携」の適切かつ可能なあり方について検討することを目的に、本研究は行われた。

〔研究経過〕

本研究は、以下の 4 つの活動を中心に据え、相互に関連させながら行われた。

①府立医科大における心理面接の実施・研究メンバーによるインタビュー報告および事例検討：同病院「子ども心療外来」において、母子並行面接の形態で研究メンバーが心

理面接を行い、インテーク報告（新規申込受理時）ならびに研究グループ内での事例検討（2回）を行った。それにより、実践を通して、小児科領域、プレイセラピーにおける主訴、枠の問題などについて、発表者と共に検討する機会が得られた。②学会発表：以前行った医師との合同勉強会で得られた質問・意見を分析し、看護師との勉強会で得られた知見と比較することで考察を深め、ポスター形式で心理臨床学会第28回大会において発表した（2009年9月20日、於東京国際フォーラム）。③講師招聘による事例検討会の実施：山中康裕先生（ヘルメス研究所所長）を講師に迎え、メンバー発表形式の事例検討会を2回実施した。④医療従事者との事例検討会の実施（府立医科大での症例検討会）：本研究グループの活動紹介・プレイセラピーと親子並行面接の解説・「子ども心療外来」での親子並行面接事例の経過について発表し、ディスカッションを行った。

これらの活動を通じて、メンバー個々の心理臨床実践ならびに事例を読み解く力を養うとともに、医療従事者など他職種との間で、いかに互いの専門性を活かしながらよりよい連携を行うことが可能か、その検討を試みた。

【研究成果】

まず、①府立医科大における心理面接の実施・インテーク報告および事例検討を定期的に重ねたことは、個々の事例や小児科における心理臨床への理解を深め、自らの実践を問い直す機会となった。また、他職種の専門家に、事例で何が起きているのか、心理面接で目指していることが何であるのかを伝えるための、言語化を進める上でも、有用な試みだったといえよう。次に、②学会発表からは、心理士が他職種の専門家と連携しようとする際、現象のとらえかたや共通言語がそれぞれに異なるという点を認識することが、まず重要であると推察された。そして、アプローチの方法は違うものの、医師との間にも、看護師との間にも、繋がるチャンネルを見出すことは可能であり、例えば、母親面接への関心の高さを端緒として、心理臨床への理解を更に得る試みは、有効な工夫の一つと考えられた。また、③講師招聘による事例検討会では、メンバーの主体的な発表と講師による示唆に富むコメントを聴くことを通して、一段深い事例の理解、ひいては心理臨床に関する多角的な視座を養う機会が得られた。最後に、④医師との症例検討会では、心理臨床実践・事例検討会の積み重ねと学会発表で得られた知見を反映させた発表を行い、一定の成果につなげることができたと考える。特に、プレイセラピーや親子並行面接のあり方など一般化された質問に対して、発表事例に照らして具体的に応答することにより、医師の理解がすすみ、ディスカッションが深められたように思われた。

今後も、これらの活動を継続して行うことにより、他職種との相互理解を深め、小児科領域における心理臨床実践と連携を確かなものとしていきたいと考える。

研究協力者：平竹晋也（京都府立医科大学付属病院）・西浦太郎（M2）・山本尚代（M2）・
江城望（M1）